

帰りのホームルームでガラスの小瓶が配られる。

小瓶に名前を書くの中に綺麗な石が現れた。

色や形は人それぞれ。皆、突然現れた石に目を丸くしている。

不思議なのはそれだけではない。石はどうやっても小瓶の中から取り出せない。触れてみようにもまるで蜃気楼のように指をすり抜けてしまう。

武田君なんて小瓶を割ろうとするものだから先生に怒られていた。

” 努力の結晶

触れたり取り出したりは出来ないが、自身の頑張りを目視出来るもの。

それ自体は当然知っていたが、実際手にしてみると未知との遭遇って感じがしてドキドキする。

隣の席の山本君はさすがバスケット部キャプテン。結晶の色と形はバスケットボールみたいで、努力量に比例しているのか大きく見える。

そんな山本君の小瓶から手元の小瓶へと視線を移す。思わずため息が出た。

私の小瓶には、何も入っていない。

当然か：私は努力が嫌いだ。そんな私に努力の結晶なんて現れるわけがない。

皆、自身の小瓶を見つめたり、友達同士で見せ合ったりと目を輝かせている。

小瓶を見つめていないのは私だけだった。

ホームルームが終わると足早に教室を出る。今日は誰にも話しかけられたくない。努力の結晶を誰にも見られたくない。

だから図書室へと逃げ込み、皆が帰るまで隅で一人、本を読んで過ごした。

夕日が教室を赤く染め始めた頃、図書室の鍵を返しに職員室に来た。

「努力の結晶、どうだった？」

それは先生からすれば何気ない質問。

先生ならいいかと、鞆から小瓶を取り出し何も言わず見せた。

「透明か：努力が目に見えないな」

その一言に私の嫌な部分が鎌首をもたげた。

私には兄がいる。努力家で、自慢の兄だ。野球が好きでプロ野球選手になるんだといつも私に語ってくれていた。

だが兄は努力によって潰された。毎日の練習が原因で体を壊し、野球が出来なくなった。

私は頑張る兄を否定しない。

だが兄を否定した努力を否定する。

兄を認めない努力なんて、大嫌いだ。

「遅くなってすみません。体育館の鍵です」

ハッと我に返る。山本君が鍵を先生に渡していた。

「山本は努力の結晶、どうだった？」

私に聞いたのと同じ質問をする先生。

先生はきつと山本君の努力の結晶を見て驚くだろう。私とは真逆で、はっきりと目に見える結晶なのだから。

だが山本君の努力の結晶を見て驚いたのは私の方だった。

山本君の努力の結晶は大きな亀裂が入っていて、そこから零れ落ちた欠片が小瓶を中から傷つけていた。

数時間前に見たものがあまりにも変わり果てていた為、言葉を失う。

「先生：俺、バスケやめようと思っっています」

ぐつとこらえるように告げる山本君。

先生は「そうか…」としか答えない。

私も何も言わない。こういう時、下手な慰めは相手を傷つけるだけだ。

『頑張れ』

普通ならそうやって励ますだろう。でもそれは間違いだ。

頑張っている者に“頑張れ”は重荷にしかならない。

山本君は今、その重圧に潰されかけている。

努力が目に見えてしまっているからこそ、山本君は苦しんでいる。

「君達は積み上げてきた人と積み上げてこなかった人、どちらが偉いと思う？」

先生の問いかけに山本君は「積み上げてきた人」と答えた。話の流れから、きつと努力についての二択と考えたのだろう。

私は「積み上げてこなかった人」と答えた。先生の質問をパズルゲームの話として考えた。

積み上げすぎると負けになるゲームを思いつくなんて、我ながら捻くれている。

だが先生は意外にも私の答えに頷いた。

「先生も努力は積み上げるだけじゃダメだと思う。ただ積み上げていくだけの努力だと、いつか心と体が崩れてしまう。今の山本みたいにな」

山本君の小瓶に目を向ける。小瓶を自分自身に置き換えると、努力の結晶であるそれは自身を中から壊す恐ろしいものに見えてきた。

「世の中には、“間違った努力”というものも存在する。何が正しい努力かなんて、先生にも分からない。それは山本しか分からないし、他の誰かに答えられるものでもない」

突き放すような先生の言葉に俯く山本君。

「だが同時に間違った努力は脆く、誰かの何気ない一言で崩れ去る事もある」

そんな簡単に解決できるのなら、こんなにも悩まないだろう…この人は本当に教師か？視線をさまよわせる山本君はちらちらと私を見てくる。まさか私に“何気ない一言”を求めているのではないだろうか？

はあ…どうしたらいいかなんて私に分かるわけない。

その上で何か言っただけなら、私に言える事はただ一つ。

好きを嫌いになるような努力なら、やめちゃえば？

私の一言に目を丸くする山本君。先生がくつくつと笑うのを見て、ぷつ、と吹き出した。「何だよ、好きを嫌いになる努力って。そんな努力、初めて聞いたぞ」

山本君は目に涙を浮かべている。そんなにおかしかったのだろうか？

「おかしいよ。おかしかったよ。何で俺、こんなに苦しんでまでバスケットやっているんだって思うと、自分のおかしさに涙出てきた」

バスケが山本君を苦しめていたのかと思うと、やっぱり努力なんてするものじゃない、努力は人を苦しめるだけじゃないか、と悪態を吐きたくなる。

「でもおかげで目が覚めた。俺、バスケが好きだから努力してたんだ。別にキャプテン続けたくて努力してたわけじゃないんだよな…ありがと。俺、バスケ続けるよ。やっぱりバスケが好きだからさ、もっと好きになる努力をするよ」

迷いの晴れたその顔はコートで見た、皆を引っ張る魅力的な笑顔だった。

私には自分を苦しめるバスケを好きになろうとする山本君の気持ちがよく分からない。

そう思う私がおかしいのか、それとも山本君がおかしいままなのか…どっちでもいいか。山本君は立ち直ったようだし、わざわざそれに水を差すまでもない。

山本君が帰った後、先生は私の小瓶をじつと見つめる。

何度見ても同じだ。中は何も入っていない。

「そうか？先生には中の結晶が見えているぞ。その小瓶、夕日に向けてみなさい」

先生の言葉に従い、小瓶を夕日に向けてみる。…やっぱり何も入っていない。

ため息を吐く私を見て、床を指さす先生。視線を動かすとそこには小瓶の影の中に三角柱の形をした影がうつすらと見えた。

「努力の結晶の一つに“目に見えない努力”というのものもある。山本の努力は“バスケットが上手くなる”という結果と結晶が繋がっているから目に見えた。だけど君の努力の結晶は結果というものがあるかどうかすら分からないから見えにくいんだ」

首を傾げる。何度も言うが、私は努力なんてしていない。

「いいや、しているさ。さっき山本を傷つけないようにとわざと励まさなかっただろう？それは他人の痛みを知る努力をした者にしか出来ない事だ。自分から進んで培う努力があるように、知らず知らずの内に培われていく努力もある。君は後者だからこそ、自分でもその努力を実感できなかったのだろう」

先生は机から小瓶を取り出した。

「先生の努力の結晶だ。君と同じ、透明の結晶さ。これを使って面白いものを見せてあげよう」

小瓶を夕日へと向ける先生。何をしているんだろうと思って見ていると、小瓶から虹が

生まれた。

「プリズムと言って、光を屈折させる事で起こる現象だ。先生こう見えて、凄く性格が捻くれていているんだ。どうやらそれが努力の結晶にも作用したらしい」

悪戯っぽい笑顔を浮かべる先生に思わず笑ってしまう。

私も夕日に小瓶をかざしてみる。

ひねくれ者の私の努力の結晶からも、小さな虹が生まれていた。